繪本金華傳

六下

へ13
3985
6

門へ13
號3985
巻6

昭41年12月20日寄贈
原安三郎

41 9685

國立公文書館
内閣文庫

限りなる仇兇悪人一家みな及ひ従ひ必ず若しめ
安洲の妙伝りんく居間ふ悪人り来くと教宮したと的に助法書
いろわぐ歳しくもるなかしも知れざる撰を方ゆりかべし自秀
撰捕れ内猶とるるも君の忠臣伝あるべきやゆめくは字巻
あるべうぐ固く禁物宮め同年極月廿日の夜悪びへべ完
まりける

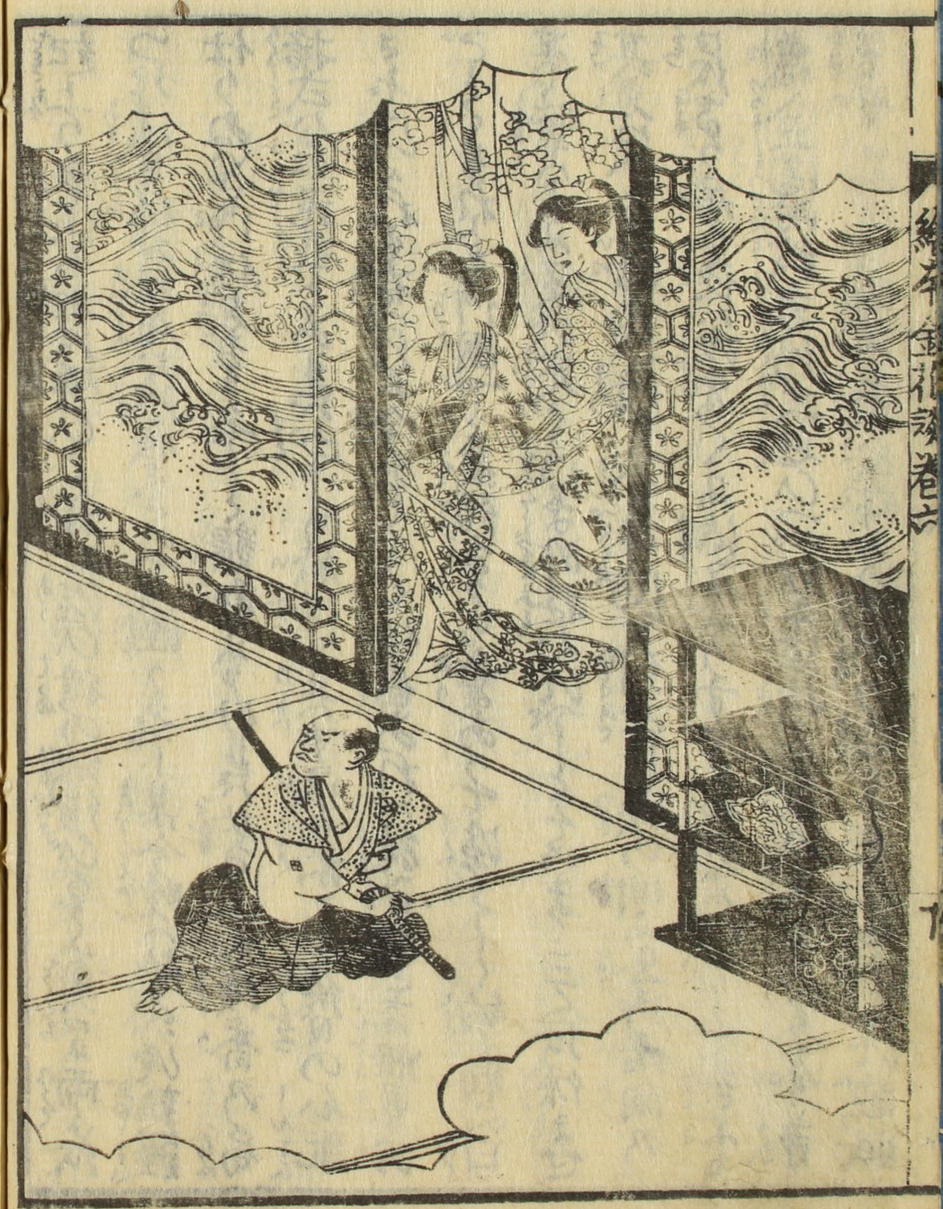
松並的に助伝教伝

国家者ふして忠臣弱と宜るるか大賊左実義ふ友衛退隠し
由ふし後幼主女子代のとれふあうう競ふ其臣君伝対うしうども
忠臣側ふあうく共討因る妻あさふ妻ふ松並的に助法書とたさ
幼主伝ちう主夜仏と考しし去年九月十六日すでふ毒物の寿爰巳

のちの孫がしも高うく聞えの老医より的〻助一人の養子こいとも
君の側に去るまく錦により円の諸義と兎さまき居間の涙と的〻
夜の諸仏こまぐあけ処ふ助く守護〻なるされども自我点あんろし
浅香ろ〻人ふ人の乳母おあやまりぶこと糸〻食セ的〻助と共ふ
毎夜不寝の番とろ〻夜半ごろと完め俄で今晩暮時より夜半
まで八浅香乳母と二人ゆく君に成るり其間ふ的〻助体退夜まよう
的〻助起〻く的方までとるり二人ゆ体良〻まさ拝晩を看こうし
的〻助るり二天後より三女的〻ごとるり手ふ〻〻の点ろう〻既ふ
極月廿日ふ〻成よる氏日ハ別て宴つ〻く親風厳〻く起りて
世上ろく雪降り今看ハ的〻助夜半より的〻成るる夜ろ〻ハ
看より涙の間の屋風の円ふ体良〻夜半の時半寝耳ふ〻ろ〻

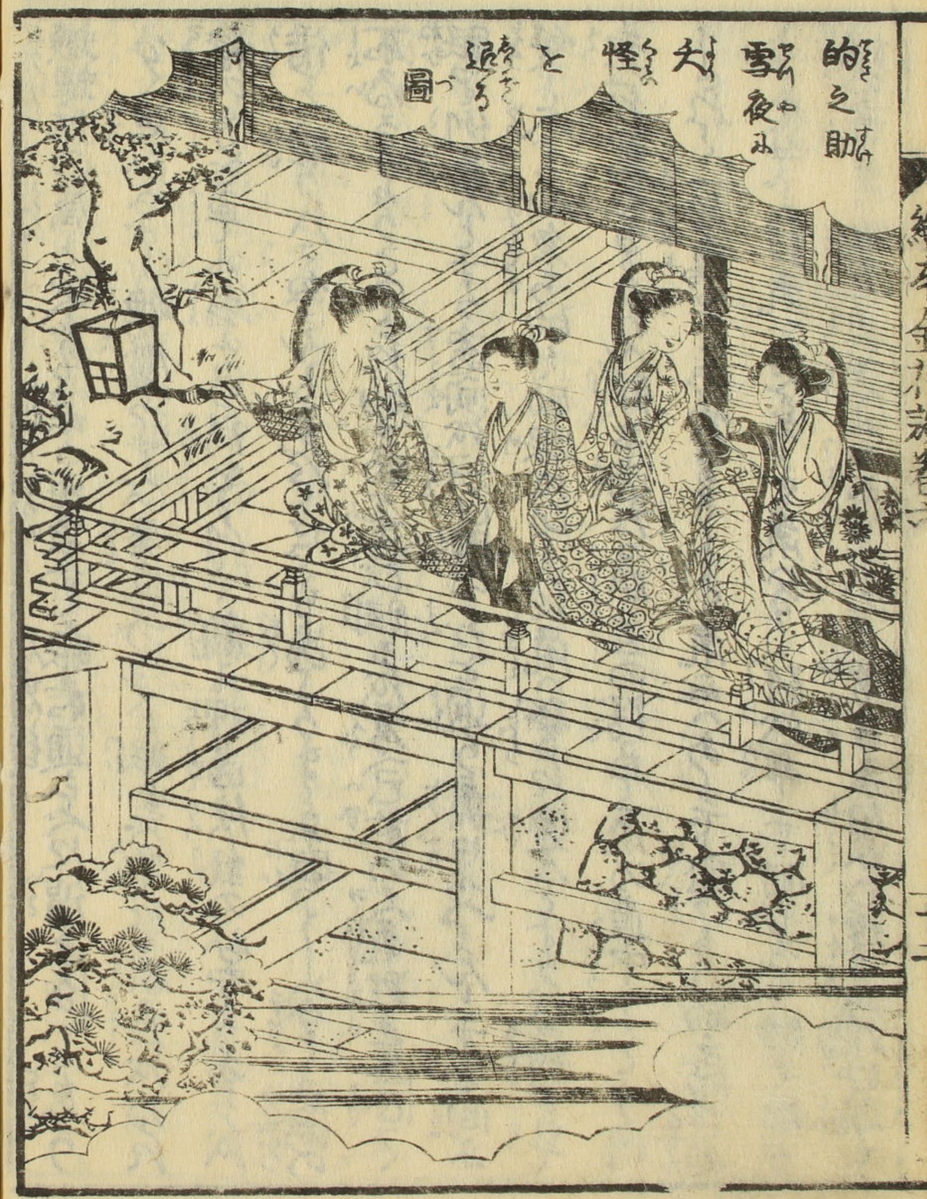
起上り点れの水沈碎ひく顔を洗ハ猪の紋絞びるく裏口ふ雨ふ成
つ〻ふ表梅お綾度お涙度ごさぶめて睡うるべ〻某今晩ハ却りハ〻熟睡
仕りぬいざ〻体良ろくべ〻と懇懇ふ申ける兵女〻も浅香乃局
搖式ハ成老並とあまぶ〻も威儀と矣ずハ〻茶こそ終日の心配
さで八つれも有べ〻ふ今志たく体良あれば祝るをと言諸男の
ごとくるれども何国や〻桑弱るる愛あって強〻く的〻助と日
菓ぶ輩ハ〻ふ兵〻定く成まハ拒だ〻べ〻とそのまゝ二人成体まを
其家ハ人〻の寝る成待く金屏風を引廻し涙の間ふ歩行居間乃
只成るり居る夜ハ涙水〻くふ浅〻ふ四更ふ向〻して茶本ふ
寝入丑満時越方行末思ひつづけ看る打〻不忍義ろう糸今看
美智　助ゲ三の人角点の成端の悪闘のるところ紀却り〻〻睡眠

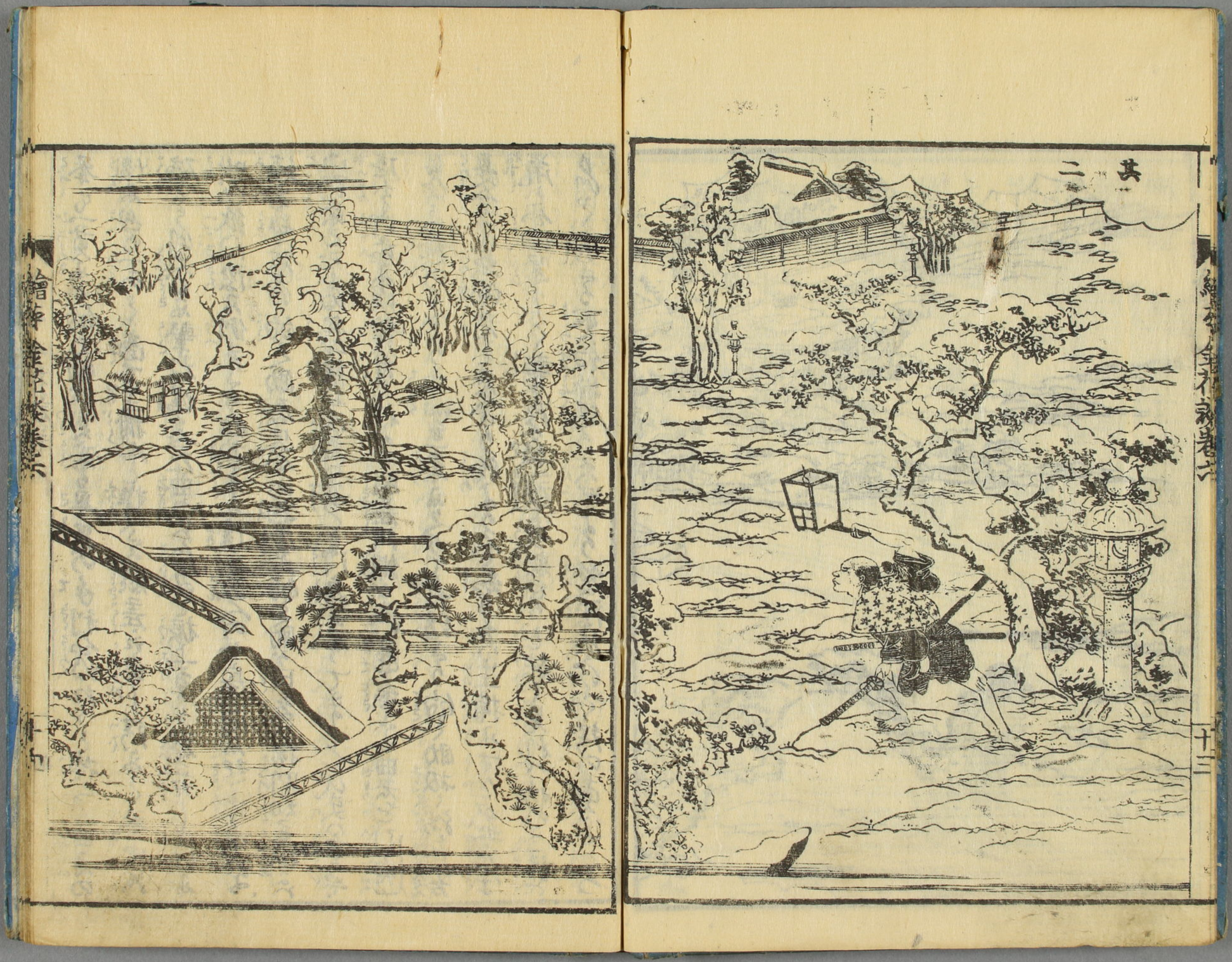
的之助
菅の
切る
圖



きざけるまで勞めく両眼を開くんとする為一刀宝剣を引ぬき如く其上
前に焼したる焼火赫然として焔を揮して忽ち冥く滅してとて広しく
消んとする的く助其焼火捨てんとするかあれども頻り為睡魔ら
ざれ吾身ながらつづ物を戒めるれ幸国に出て為業すべき五色
彩なれども忠臣忠義の心の間くとても睡眠偽りの者なろう
睡眠の発きるに身の労をてるる故なるべし忠誠の意まる四人やと
情仏牛馬しき志を最あり眼眠と見るべけば不思議なるるる
仏の主の僕に入来りて曹通りへおく大なる鼠一疋眼の間に
何しか形間に入らんとする的く助ず眼眠瞳見もしくと鼠に其後
迹を去りて秋に冷ぬ鼠の振舞を請くの入口鼠の入べき遠もるる
此辺着て鼠の往来をる故に見的へるるるで鼠に如ろ

蟻螻蛄の属とへども某の恵多する眼前通ぶに渇望と
思ひ〳〵睡魔ふてび発ろうるくと眼を閉ぶ第なる服差に
鞍の方を乗に垂その弱とりく額に押当鉄鉢のもくらるに
借く睡ろ眼さんとまぶらせども寄るまに眠ったり全く出来の
不ろるうろこの的之助ず再び眠る眼考に己前の大鼠那を出心く
眠を倒まんとする透間に何ひ膝のあを通り奥に入ぶんとする間に
撃と入る間忽ち的く助眼眼ひけば鼠に乗る逃んとする扇を
歩ぶ出ぶやうけん額に当たる服差の弱に乗て鼠の直中丁ごろ
うれく一撃鳴呼としたまるく鼠に入ろう的之助情絶
して地ぶに鼠を刀を出ども鼠に眼にす間もなく的之助ず
後の方より真黒に色なる一人の大男に入白刃の短刀を抜け腕も


的之助
雪夜
大
怪
を
追う
図


繪本金花談巻六
十二
其二
繪本金花談巻六
十三

拳も一貫目と的之助実者の子利仙はたらと捨てう曲者の
後ろ姿ゆうあく者て生捕んと携へる服差を変し殘り中紙
確とうの大分を撃れ場之人元曲者の白刃を振上るゝ琴若しけ
叫び紙門際へ例まるの山抱まる情さ三人の女房同も起へよう中な
淀書部屋へ的之助白刃へ格別初差掛へ
別象ござるぬ死。お後お決君い安く汁寝るてまゝくいまへ
使分御所へ山伏付くれて服差偏ぽ歯寄る曲者を引発
見る顔のうへ血流を茶ふうて裏絵う的之助扱く殘る吉
是今く西湖者と見へう物よりと殺うの生捕みするの安ない
乱と仙堅しく撃たる放誤て斬殺せと絵く見れへ物めの殘と
めく歯うる所へ但脈通う所中より髪陰絵へく殘の歯ところ

皮肉傷れ骨肉砕血ひ〳〵と大事の殺部るう後の歯たる
所へ甲骨の下のうさ才五の骨の左うの方紙公の命のけて是も殘の
歯う所骨ぐけ皮肉ぐうう二寸所の急所絵の力れ紙せく殺る
さの歯たるのより二言くいう寸死しるも程うるう流るも曲者の
死したる真紙悔されも的之助ぐ者の紙絵びけの人の和ざる社
幸ひるれ密と死骸を我部屋の内る長持へ家来へ、合先
人られ海中るぐ捨さうげる紙絵ふりてる悪討公ぐ
たるりの是拍思へすると死へ自殺と懐れ懐ろ悪事やむ道理るう
名今育のこの沙汰ひ是て直しうんとけ是べ其夜の内の流書の
斗ひのごゝくのでるしけける

松並的く助義維事

斯く兵庫が家来に戈原勘解由まうて夜来定めく友千代が居間の
うち落動起る事もあるんと伺ふ家来何の事も思ひ萩野小助が動止
いぶかりやと同じ兵庫も不思議の眉を顰め家来も今朝よりの小助が
便り不伺ども曉漢去れぞ去ることのりの流石妻子なるものゆへ一命
惜く成て出奔しるとうり圍えへ大事に注進に出るば
家来共の者のうへとうと安心もるうけう廿日ばうちく伝のとるく
屋敷中ひそくとりるる去る夜御居間の方騒しくなるはしうへ
何う曲者あるく御居間に忍入しを松並的く助通く曲殺し
返海す迄ども及ば密に流書ば下部に付海中へ捨ろうとと
れば兵庫も勘弟由もこれに安堵のおりしをるるに内に後
ぬぐに陸に尋ねとそども流香的く助通ばつめく急うるく

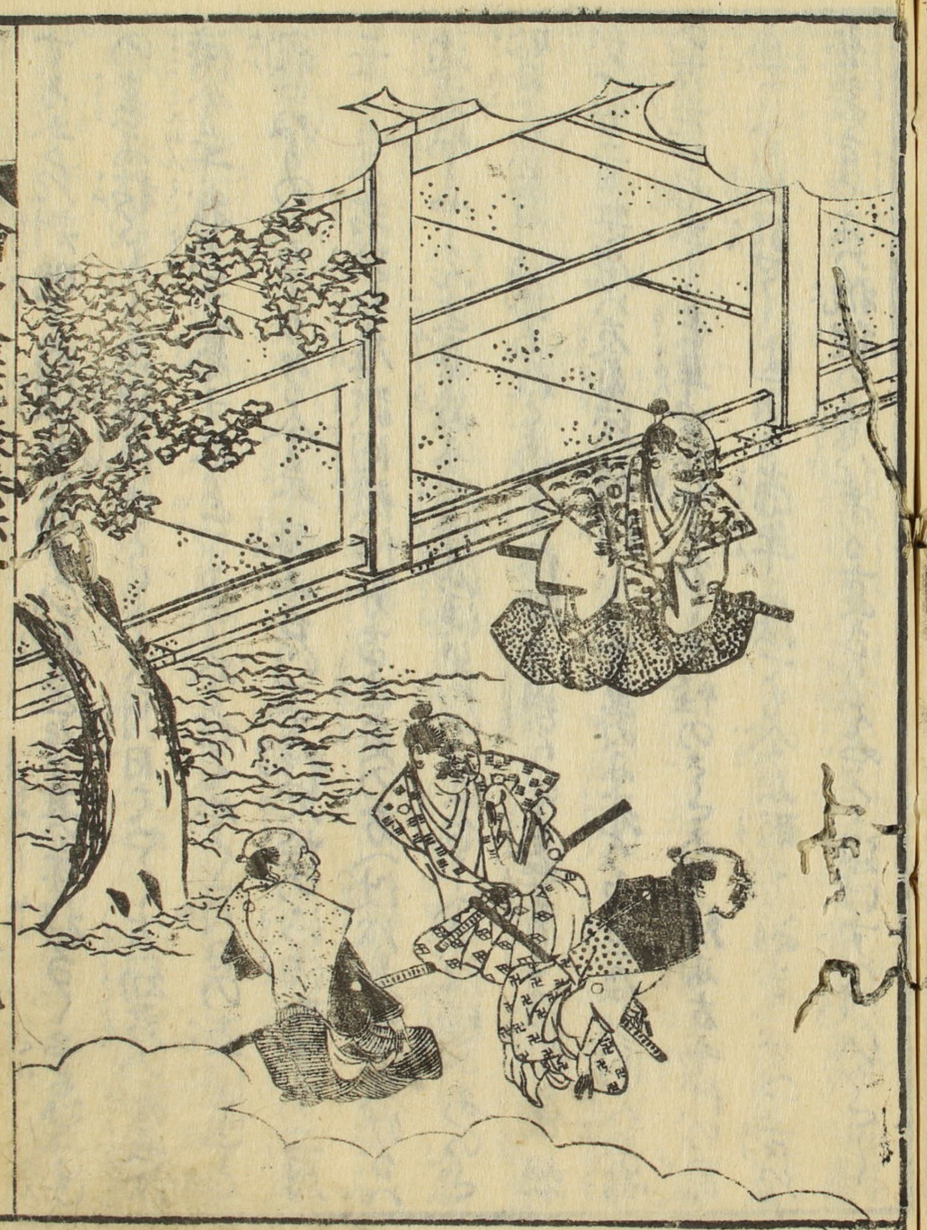
十計すでに尽くく思ひ九月に入ろうる兵庫に陸に尋ねとひ切く年
月に送る間に友千代や十七歳に成るを流石
計略用ゆる事ひるひくく家すでに年齢六十に成りつ春生の
中に奉家に奉ひ垂ずばわが子を波まる世に入るくる朝ひくと
うるべしいうる奇計に出てうさんや何事の乃友千代が側に浅書的の助
両人ぶるに時に出に返事よりも大やく計略に用ひべし才系も
うちうるに乃巣一つの計を出しこの両人を退るを略成にしと
ぶそうに耳に出に計策をさくやに乃れば兵庫ぞるるべよるべ
に計に出るうとこれより才系に右兼沢井平之丞を味的之助う
多流の出仕に出ぬ〳〵沒に多流に似せく一通と渡めよるくるに
平之丞のとうる伝奉の名人乃風逸勢の筆勢とのべども一たび

繪本金花談巻六
護明院壇紙
繁く
加持する
圖

見てくれ〜もたぐひなるが如くに似せられば一家にも及ばざる似せんとや
にて斯く書系文法と作り半ばを悪に書せ淺書的之助を退くる
計夏代ばかりなる始るに其年の冬雑談とうく鉢の因に天怪出ると
いふ浮説起り其説とうぐくみて後に何某が長家のうへにたけ
丈だうの傍注居るに代りなるものあるといへば例よう賛月の夜乃
暁がとにわか殿の屋根の上に傍牙血にそなたる女の幽霊出るに代
何某が乃ちうるさくなるぐくにて説に出それ下女童などに既に
美音よう後に戸外へ出る夏代ばれけり始るに十二月十六月の夜
ねぶる〜家雲ありなるに友千代君に雪代ばに世よとのもしければ
涙交といひ厳寒と厳さとのくども左右のくく無據のよりしに僅に
両戸代押ぶ〜代ばのけ〜れと見せるに新海庭こと〜く白雪

積り諸木枝に花雲の絵間代照月と雪ばかりに今樹木の葉
を乃れば物の注案する形あり的之助絵〜何に〜にそのさまのごとく
半のごく月のひとり梢の新よりれ眼に映で積代振るに異
なるに友千代君もめでやに乃ちくに的之助あれ代ばんとくに的之助
死石の上に濯ぐぐう拭りめく中に乃うけへらんとするに代天怪に月く
もるる　逃失へうり勿ぶづに先に乃に嵐と乃へくる異潮去るに今暁
うーこに乃天怪代出〜新に遠し〜章代寄ひり〜御座の急りへ
刺客代入君をえうんとするに隙あるに乃ちうること事遂ようり
返〜急に乃雨戸代寒今暁の夏人〜泥法に乃表裏と固くにど発
とでる〜に乃ることれ中系が所為に乃に嵐せ悪の
者に乃云付這拵のりのを出せ〜に後に乃淺書的之助代罪に乃陸へんと

岩城友原
隠計
的之助を
隠さんと
圖



するふうに十六略して後は何ぞ知りたる人の聞きたる其に年経るまで
の裏は移すべし忠臣のともがらに月日をやくに幼君の家老に
待今年我齢十一歳十五とかもも今は何とやく月日のたつにしたがひ
須いぬるのはうろうろる今年春は言ひても狐妖怪の法やまず二月
二十一日は若狐兵庫に同役伊勢守殿の方へ使ひ入りてやはり入けるに
近来伊勢守殿へ上屋敷は妖怪法はやまず付やはり入さた取ひあいだ
明日上屋敷へ出あれとあるは伊勢守殿ひとり迎ひは及ばず
訪て扶二日兵庫は友貞に殺られ上屋敷は帰り申候及び間に五郎
の方老と成出ず去年家伝のとうく天怪のさとあり殊は友千代の用
あり出ずせず是は去る遠年は成ても今は取さこはまだすべて
至急すぐは狐狸の業化ある夏ありそやく過けすべ

幸ひ家は武士すず護明院は奇特の修験者今は
傳凝退散の祈祷付と祈日中きはしたは退付まるべしとある
老臣は後見の命令をうく何れも唯にして居る処は護明院
山伏兵庫の拒絶は後の出来り廣間の中央は壇に構へ幣帛書
具へ其後丹誠を抽んで加持の呪法尽し稍へ数行り兵庫伊勢
は向ひ居へ某は多年妖変は對し行会の呪力尽しは
り天怪の為ところ狐は奇特はつ壇上は顕れ出ぬ
最初より頻り丹誠精神凝すとも看てその奇特あり
ト云ふ一卦筮試こと云は兵庫も南もとは護明院
卦出て後ひ居へ某の占法は全く国易の
あり其すは神霊の熟卦の意は考へる法は全く

狐狸の祠なるゆゑひそかに刻は年の男女あつて密通なり。番頭親
佐〻木それゆゑ番家をも護志ゆゑ神罰の不義なる憤りうけて
遇りてあらんと志ゆゑ自天怪の扶ゆゑ相見へ眼のまくらそのの
怪なる知〻所ひそ君の御居間の角成美の方なる柱の間なる去
夏二尺ばかり土中を掘ゆゑ又二尺変〻て不思議の品出来仕えんとす
ゆゑ一度大に驚ゆゑ地それ掘て見よく下知なひ中間ども護の後
ばさ〻図の所を掘ゆゑ掘ければ四方打抜ゆゑ一尺斗の
箱あり埋ていまだ二年をも歴ざると見へさる物こそのれし持いづる
こゑ三すゑ中才ゆゑ設こ〻らくなる一物あり兵庫の物と見るゆゑ
四方ともゆゑ打抜ゆゑ一方の打抜ゆゑめさ色箱の中と見るゆゑ
黄泉霊あり〻人形の物ゆゑ紙を切く衣服〻〻持中ゆゑ千代の年

庚代出来〻〻ゆゑ遠汁を刺〻ら金く胴体の〻〻〻〻〻〻
ゆゑ〻〻〻〻ち箱のうちゆゑ一通の紙出と見〻〻〻のあり兵庫ゆゑ
〻〻〻れ紙のむゆゑその文ゆゑ曰

奉呪咀預文之事

天地海内〻魔王依く預ハく義京友千代ゆゑ性命ゆゑ断なるく
大預〻有様ゆゑ我〻両人主君幼稚〻間ゆゑ守護地ゆゑ出来い
ゆゑ不思議ゆゑ情の者宿縁〻奇隅有之ゆゑ密ゆゑ通其志階老同穴の
契ひ紙ゆゑ年ゆゑ自夫以来雖無恋情たがひゆゑ勤仕のゆゑ
四ゆゑ一日夫婦の約ゆゑ成京不絶ひ遂本国ゆゑ其志ゆゑ通んとすると
ひとも幼君まゝ通す時ハ我本国ゆゑ近支雖叶ゆゑ君が命と汝
〻ハ汝国遠ゆゑ〻〻〻遠るゆゑ仏〻ら依之佛神〻怒顧ず

名城的之助が不義を罵る図

天地の靈祇を祈り友千代が命数を断んとの事の所致か憑や
若則呪咒〻借頼力於冥道両人素懐者候今茅神明〻冥
罰難得未来無間業〻罪文沢無後悔〻心如以一紙〻頼
又所奉告至頼〻有蘇也頼文〻亦仍如件

月日　　願主両人　　禅言

とかゝり兵庫逸一郎は嶮眉に頻めし彩文の手蹟たゝるを的に助こ
そこそ遠揆の夏起こんと思へり壮年の男子をいかゝ守護の為
なれば〻そ婦人と同席ゆさ〻ゝ無恨猥の紀る夏必弦の義なり抑〻べ
しおもしろいへ呪咒頼文の類をもめく見るとなれ〻両人遠地ゆ
来り供ゆ君に守護とあるの上は法香なる夏的白なり密通の余り
なるく夫婦ゆ別れゆへ友千代と数年の役義と免れ難ゆ困みゆうて

夫婦階老の約束〻〻〻〻の仕方迷論議して貴に別べ〻と
慶間ゆ諾る後辺新兵衛と陽と出〻ゆ〻〻奥ゆ的の助法者に
連〻〻れ新兵衛畢〻〻〻〻ゆ入法香的く助不義の沢ゆ的白
ゆ家那せる御用の系あり集るべ〻と両人に成る友千代い僅ゆ
十一戈新兵衛が振舞に見〻るとよろ怒く嗔と眦を付ゆ外去両人に成
ろ立〻何方へ〻で新兵衛あるに成つて御用有ゆ石連て来るなり
友千代いよく怒り曲ひ御用と云へ何ゆ我家ゆ於く御用と云へ我用ゆ
ろう外ゆ無変なる御用ゆ悪に奴るゆゆ人分立といゆ〻無ゆの思へ
ゆゆも自殺と異る国の寺山極粒ゆ〻るの目でも拳に初ゆ新兵衛へ
新〻〻〻として放無るく境逃ゆ退く慶間ゆ立還る如く行〻れ〻
友人の者に後〻〻に兵庫に〻〻〻〻大なるゆ憤る後見〻る果がてしゆ

遠ざかるべきものでなくて、こゝに引き立てられ、あまたの新参者、下の新参者、
いかんとする武士、侍、物ごとに、ひとつやまて新参者と押留め、大の新参
実に千石の武士、侍、人、その者の番方、百石、傾する人、五万石の番方
自然と異なる大国の主、其様、殿様、
寄家みて、女子代の用ようの外、唱げ、理不尽の言下、知の無知、
我が子、後見とかせども、女子代、
一言、女子代、ふしるよ、殿様の理、
暴悪の人、いとども、横ぶ車も、引ぐ、侍、其下、もも、ぐれ出はべ、
叔父、女子代君の前、出、兵庫、女子代、
自分と、呪咒、
大変、

ぬとあるべかりける道理、その男の害と顧ずもせず、
其言、ゆるるものども、我儘、
若り、切る、一言、流石、遠方、
流香も、同様の罪科、
流香、兵庫、
こたへく、
女子代、理、
女子代の左右侍女数多、
ぐ、流香、
昼夜の詞、

帝國圖書館藏

ぐ〻ぐ〻つゞひく〻けんと志のゝ孤交千代伊勢守の後ゝゝ伊勢長く
と伊勢とゝなれば伊勢守何そ閑享もひ教と顧らるゝゝゝ孤交千代
伊勢守の顔孤既と見ゆひ的〻助ゞゝ雅義仕〻ざる拓藤孤
孤人と其言稱〻〻ざる孤浮藤ゝ享孫孤そぐ〻ゝたるゞゝ流ゝ幼雅の
仏庵ゝゝ的之助が日比の誠忠と思ひ取ゝゝゝ兵庫の威勢ゝ拔孤失ひ
渠孤後〻〻皆射の別拔ゞゝ〻やあり弓伊勢ゝの寛仁ゝゝ孤
尺〻ゝ〻的〻助ゞゝと孤孤まゝと的〻助ゝ勿忘草のゝゝ身と拔ゝ
唯今の言肝腦地ゝまゝゝゝ君義孤拔〻〻尽ゝゝあ〻んゝ
源義孤拔〻〻法ゝゝ伊勢ゝゝ君義の仏庵孤拔ゝ〻〻落涙と思ひ
次の間ゝゝ出ゝゝ

繪本金花蔵寒之六終